



TITLE:

限界経済學と制度経済學

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 限界経済學と制度経済學. 經濟論叢 1929, 29(2): 175-198

ISSUE DATE:

1929-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129780>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷九十二第

行發日一月八年四和昭

論 叢

清涼飲料稅論 法學博士 神戶 正雄

限界經濟學と制度經濟學 文學博士 米田庄太郎

勞銀の理論 文學博士 高田 保馬

說 苑

經濟學史基礎論 法學士 石川 興二

幕末の商社 經濟學士 菅野和太郎

セイの販路說に就て 經濟學士 谷口 吉彦

シュピイトホフの景氣循環論 經濟學士 靜 田 均

雜 錄

伊太利の財政經濟近況 經濟學士 有 井 治

經濟理論と經濟史 經濟學士 堀江 保藏

近著外國經濟雜誌主要論題

限界經濟學と制度經濟學

米田庄太郎

目次

- (一) 方法論上に於ける社會學と經濟學との歴史的關係
(二) 現今の米國經濟學の方法論的根本二方針としての限界經濟學と制度經濟學

(一) 方法論上に於ける社會學と經濟學との歴史的關係

經濟學研究者の數、經濟學研究の機關（例へば大學、專門學校、官公私立の諸種の經濟調査所、研究所等）の數、經濟學の一般的并に特殊的諸問題に關する著書、調査報告、論文の數等から外部的に見れば、今日程經濟學が隆盛を致して居る時代は、嘗てなかつたと思はれる。近頃米國の或經濟學者の調査せる所によると、今日同國の大學及び專門學校程度の諸學校に於て經濟學を教へて居る教師の數は二千三百人以上に達すると云ふことである。併し官公私立の經濟研究所、調査

會等の研究員調査員や、銀行會社の經濟事情及び經濟問題の調査員研究員を、之れに加ふれば、今日米國に於て經濟學の教授や經濟の研究調査に従事する人々の數は、實に大なるものであらうと思はれる。又ヤハリ米國の或經濟學者や同國に於ける四季刊行の或經濟學雜誌の近頃の一冊に就て調査せるに、同冊中に批評され紹介されて居る新著の數は三十三、只題名だけ列擧されて居る新著の數は四百七十八、「文書、報告、及び法令」の項目の下に擧げられて居るものは百十八、簡単に紹介され又は題名だけ擧げられて居る雜誌論文の數は四百六十二あつたと云ふ。併し現代文化國に於て、研究者や研究機關や著書報告論文等の數から外部的に見て、今日經濟學の研究が如何に隆盛を致して居るかを學ぶには、吾人は敢て外國の例を求めるを要しない。我國今日の狀態を見れば充分である。タトヒ圓本であるとは云へ、改造社の經濟學全集の初めの數卷の如き理論的な經濟學書が、夫れ夫れ十萬部以上も賣れたと云ふ噂だけでも、今日我國に於て經濟學の研究が如何に盛んであるかは推察される。

外部的に見れば、今日文化國民に於ける經濟學の研究は、實に未曾有の隆盛を致して居る。然るに夫れに拘らず、今日經濟學は一大危機に遭遇して居ると云はれて居る。何故であるか。夫れはつまり方法論上の理由に因つてゐる。即ち科學としての經濟學は、如何にして確立され得るかと云ふ問題に關してゐる。

夫れ科學の目標は眞理其物を究明するにあるので、其の究明せる眞理が人生に有益であるや否やは、科學の敢て關心す可き事柄でないと言張する人々がある。云ふまでもなく科學の直接目的即ち其の認識目標は眞理の究明である。併し科學は人生と無關係のものでなく、否な人生の一面である以上、夫れは本來人生を益す可きものである。プラグマチズムの主張する如く、眞理は人生に有益であるが故に眞理であるのではないが、併し眞理であるが故に、人生を益す可きものである。かくて科學の直接目的は眞理其物の究明にあるが、しかも眞理其物は眞理として人生を益す可きものである以上、科學の究極目的は人生を益することにある可きである。されど此處に大に注意す可きは、科學の究明する眞理、科學の與へる眞實なる知識が、人生に有益であると言ふは、必ずしも人間の目的に對して、或は階級的的目的に對して直ちに役立つと云ふ意味ではないことである。否な科學の與へる眞實なる知識が、目前の目的或は階級的的目的に對しては、有害である場合も決して少なくない。之れに反して科學的知識でなくして、目前の目的或は階級的的に有益なる知識もある。されば科學的知識は結局人生を益す可きものであるからとて、夫れは直ちに目前の目的或は階級的的目的に、有効に役立つ可きものであると考へてはならないと同時に、目前の目的或は階級的的目的に有益であるからとて、夫れは直ちに科學的知識であると考へてもならない。

現代文化國民に於ける今日の經濟學の隆盛は目前の目的或は階級的目的に對して實に有益なる多大の知識を與へて居る。しかも科學としての今日の經濟學の價值が問題となるのは、其の與へる有益なる知識が、果して眞に科學的知識であるや否やは疑はしいからである。然らば其の疑問は如何にして氷解さる可きか。詳しく云へば今日經濟學の與へる知識が、眞に科學的知識であるや否やは、何によつて判斷さる可きか。云ふまでもなく夫れは學問論(die Wissenschaftslehre)によりて始めて正當に解決さる可き問題である。詳言すれば科學の一般の本質、分類及び各科學部類の論理的構造が確實に決定され、そうして經濟學は科學として何れの科學部類に屬す可きか、確定されることによりて、經濟學の究明する真理、即ち經濟學の與へる科學的知識が本來如何なるものである可きか、了解され、此處に吾人は始めて眞に科學的なる經濟學的知識は、如何にして獲得さる可きものであるかを見定め、又今日一般に經濟學と稱せられる種々雑多な研究が與へる種々雑多な知識中、何れのが眞に經濟學的知識であるかを判斷することが出来るのである。

されば今日經濟學をして其の危機を脱せしめ、眞に科學として之を確立する爲めには、吾人は歴史的に、又統計的に、更に土俗學的にも、只經濟的事實を蒐集するだけでは充分でなく、又只現實なる經濟事情を詳しく記述するだけでも充分でなく、更に只既存の理論的方針の何れかを徹

底的に推し進めて行くだけでも充分でない。尙ほ其等の總てを企だて、も充分でない。吾人は實に學問論上より根本的に、科學としての經濟學の論理的構造を究明し確立せねばならないのである。是れ近來歐米諸國に於て、殊に學問論の研究が大に發達して居る獨澳に於て、經濟學方法論が盛んに論究されて來た所以であると思ふ。

然るに私はさきに本雜誌に於て發表せる論文中に述べし如く、學問論の現状や、社會科學の現狀から見て、一切の社會科學の方法論を研究することを、社會學の少なくとも當面な一任務と認め、私が社會學の本質的の二部門と見る純正社會學と總合社會學との外に、組織社會學或は社會科學一般方法論と稱する一部門を設定せんとするのである。かくて私は科學としての經濟學の論理的構造を究明し確立することも、ヤハリ社會學の一問題と考へて居るのであるが、夫れは常に論理的理由によるのみならず、更に歴史的理由にもよるのである。然るに方法論上に於ける社會學と經濟學との、特に密接なる歴史的關係に就ては、社會學者間にも亦經濟學者間にも、まだ充分に注意した人はないと思ふから、私は此處に特に其の點に就て少しく述べて置きたいと思ふ。

今英國經濟學に於て、特に方法論が重要な問題として論究されて來たのはケーアンズ、クリップ・レスリー、イングラム等からであるが (Elliot Cairnes, Some Leading Principles of Political Economy newly Expounded, 1874. Character and Logical Method of Political Economy, 1875,

Thomas Edwards Cliffe Leslie, *Essays Moral and Political*, 1879. Joan Kells Ingram, *The Present Position and Prospects of Political Economy*, 1878. A History of Political Economy, 1885.) 併し其等の人々に先だちて既に、ゼー・エス・ミルは組織的に經濟學方法論を論述して居た。(J. S. Mill, *Essays on Unsettled Questions in Political Economy*, written 1831, published 1844. *System of Logic*, 1843.) それど又彼以前には、まだ何人も之を組織的に論述して居ないと思はれる。かくて經濟學方法論を始めて組織的に論述したのは、ゼー・エス・ミルであると認めねばならないが、然るに私はさきに本雜誌に於て公にせる、ミルの社會科學方法論に關する諸論文に論述せる如く、ミルの社會科學方法論は本來コントの社會學方法論を基礎として、其の上に展開されたものにして、特にミルの經濟學方法論に就て見れば、夫れはコントの社會學方法論とは大に異なつて居るが、しかも後者を離れては前者は確立され得ない。要するにミルはコントの社會學方法論を基礎とし或は背景として、英國經濟學傳來の方法論を組織的に確立したのである。されば若しコントがミルに先立ちて、社會學方法論を組織的に論述して居なかつたならば、ミルは到底彼の經濟學方法論を始め其の他の社會科學方法論を、少なくとも彼が成就せる仕方にて、組織的に展開することが出来なかつたであらうと思はれる。かくて經濟學方法論は歴史的には社會學方法論に基いて發達せるものと云はねばならぬ。然るに更にコント自身は如何にして彼の社會學方

法論を築き上げたかを詳しく吟味して見ると、彼は全くサン・シモンに負ふ處なきものゝ如く自ら述べて居たに拘らず、殊に彼の門下生がサン・シモン派の人々の非難に對して彼の獨創性を大に主張して居たに拘らず、彼の社會學方法論の根本的思想は實質的にはサン・シモンが既に斷片的に論述して居たものにして、彼は之をサン・シモンから學んだのであることは、アラングリなどの詳しき研究によりて明白である。されどコントの如く當代の主要なる哲學及び諸科學を百科全書的に、しかも組織的統一的に研究して、博大なる學識と卓越せる論理的推理力を具備せる天才的學者に非らずは、サン・シモンの斷片的思想を總合し統一し、詳しく深く展開して、廣大なる學的體系を築き上げることの不可能なるは、サン・シモンの多數の門下生中、コントに比す可き學的事業を成就せるものが一人もないことによつても察知される。そうしてコント派の人々が、コントがサン・シモンに接する以前に、後年彼の社會學の基礎となれる或思想を、既にサン・シモンから獨立に發達させて居たことを證明するものとして重要視する、コントが千八百十八年(即ち彼が二十才の年)、サン・シモンの門に入る前に、サン・シモンに送れる書簡は、彼等が考へるほど、コントのサン・シモンに對する獨創性を證明するものとは思はれないが、併し私は方法論上に於ける社會學と經濟學との歴史的關係を究明する爲めには、甚だ興味ある事實が、夫れから學ばれると思ふ。それで此處には特に其の點に注目して、右の書簡の主要なる部分を譯

して置く。

唯一の合理的なる政治學 (La politique) は經濟學 (l'économie politique) であることを、始めて明白に言述したるは、貴下であるが故に、貴下は其の事を何人よりもよりよく熟知されて居ると思ふ。然るに今經濟學は嚴密に云へばまだ一の科學でない。是れ今日の經濟學は一の科學となる爲めに必要なる一基礎を缺いて居るからである。今日の經濟學は實に多數の實證的眞理を有して居るが、併し此等の眞理は今日までの處では、只分離せる個々の諸觀察に外ならないので、經濟學に於て一の全體を形成するのてなく、寧ろ一の寄せ集めをなすに外ならぬ。……要するに經濟學を研究する總ての頭腦の勝れたる人々は、夫れは眞實な一般的基礎を有しないことを直ちに感識する。そうして私の見る處によれば、經濟學にかゝる基礎を與へることは、斯學の進歩の爲めに今日吾人の成し得る甚だ重要な仕事である。然るに今此の目的は、財産制度は一切の制度中最とも重要なものにして、生産に最も有益なる仕方にて於て構成する可きである」と云ふ貴下の基本的思想によりて成就されと思はれる。經濟學に於て收得された一切の眞理は、此の優秀なる思想に總て結び附け得られると思はれるが、夫れによりて經濟學は經濟的諸觀察に基いて眞實なる政治學を建設する手段を供給するのである。そうして此の全體を整理する仕事、即ち實證的政治學を形成する仕事は、實に優秀なる仕事であると私は確信する。

私は此際只右の如くに要旨を述べるに止めるが、貴下若し私の考へに多少の興味を感じられ、又私の考へが些少なりとも貴下を益する所有り得ると考へられるならば、經濟學つまりは實證的政治學に關する尙ほ詳しく論述を、後日貴下に送呈したいと思ふ。其の場合に私は經濟學が今日までに成就せる主要なる進歩、先づ其の創設者即ち佛蘭西經濟學者（豫め申上げて置くが、私の見る處では今日の學者は其等の經濟學者の眞價をよく了解して居ない）の手によりて、又引き續いてスミス、マルサス及びセー等の手によりて成就された主要なる進歩を詳しく検査したいと思ふ。

尙ほ私は後日倫理學に關する考察をも、貴下に呈することが出来ると思ふ。蓋し私の考へる處によれば、倫理學もヤハリ政治學と同様に新たに建設する可き一の科學であるからである。私は世に流布する甚だ尊重す可き、又甚だ有用なる倫理の諸原理に對して、決して異議を挿まんとするものでないが、しかも其等の諸原理は不充分であると敢て斷言したい。其等の諸原理中の最大な又最も普及せるもの、即ち隣人の愛の原理は、實際に於ては一の情操の表出に外ならずして、行爲の規則ではない。他の殆んど總ての原理も同様である。然るに夫れ自身に於ては最も尊重す可き情操も、其の作用が實證的知識によりて指導されない場合には、社會の幸福に對して殆んど常に無効であり、更に時としては甚だ有害なるときもある。隣人の愛（殆んど總ての他の倫理原理は此の原理の種々なる變容に外ならぬ）を例として考へるに、若し此の原理が其の實際の應用に於て、隣人に有益である手段の知識によりて指導されないならば、屢々夫れから他人の利益が生じないことは明白でないか。善き志向が知識の缺乏の爲めに屢々甚だ有害なる行爲を誘致すると云ふことは、吾人が日常實見する事實である。されば一層重要なことは、人々にこの又はかの情操を抱かしめんと努めることと云ふことは、（是れかゝる努力は總て殆んど常に無用であるか）又は無効である

からである。同胞の爲めに有益である實證的手段を個人に教へて、個人が感ずる情操を人類の爲めに利用せんと努めることである可きである。蓋し自然は相愛する性向を本來人間に賦與して居るので、人間は相互に他を益する手段を明かに知得する以上は、之を實行する機會を直ちに捉へるからである。

されば吾人は社會的秩序を顛覆せんと欲するものであると非難される恐れなしに、其等の倫理原理は全く情操に外ならぬが故に、全然不充分であると考え、又斷言するを得、隨ふて總て其等の原理は何れも社會の眞の利益に總ての點に於て合致することを承認すると、尙ほ一の實證的な倫理學の形成を切望し得ると思ふ。そうして此の實證的な倫理學は政治學と同じく、經濟學に接本される可きであると思ふ。是れ私の考へによれば倫理的規則は政治的の制度と同じく、夫れが生産の上に及ぼし、又及ぼし得る影響に従ふて判斷される可きであるからである。そうして右の見地から考察し、かくて始めて實着に、全く實證的な仕方にて判斷して、一切の倫理的習慣及び意向を、例へば慈善心を檢査することは、實に興味ある業と思はれる。是れ貴下思想が貴下を導いて行く仕事であつて、しかも貴下が忽にして居るものである。……貴下は政治的實際的方針は貴下の目的を迅速に達成するに最も適切なる方針であると考えられる様であるが、併しよく熟考されるならば、此の關係に於ても、總ての他の關係に於けると同じく、先づ重要視す可きは、私が科學的或は理論的方針と稱するものであることを覺られるであらう。貴下は貴下の思想が、不幸にして貴下が訴へられて居る公衆によりてよりは、遊かにより容易に、又より迅速に、經濟學者によりて受容されるであらうと云ふことを考慮されて居ない。貴下は貴下の思想が程なく社會科學に於て一の原理として、證明された一の眞理として許容されるであらうと云ふこと、又夫れより右の性質を具備して實際的世界に現はれることによりて、遙かによりよく歡迎されるであらうと云ふことを考慮されて居ない。何れの科學にありても、理論上眞理と認められる原理は、常に實際の中に必然的に輸入されるものである。そうして貴下の思想は、普通一般の知識となり得る程單純なるものであるが故に、甚だ迅速に右の利益を受けるであらう。

……私は上に述べし經濟學に關する論文を、近々貴下に送呈する光榮を有するであらう。……(マントの遺言執行者の一人 Le Docteur Robinet, Notice sur l'oeuvre et la vie d'Auguste Comte, Troisième Edition, pp. 367-369.)

却説右に引用せるコントの書簡は、彼が二十歳の時に書いたものであるから、彼は如何に早くから經濟學を重要視し、又其の研究に大に力を注いで居たかは察知される。そうして當時既に彼の經濟學上の知識が淺薄なものでなかつたことは、當代の經濟學は事實に基く實證的知識から成

立して居るが、しかも現實な一般的な基礎を缺いて居るが爲めに、まだ科學としての組織的統一的體系を具備するに至らない事を觀破した點や、又當時の佛蘭西の經濟學者が英國の經濟學者の説に眩惑されて、經濟學の創設者としての自國の先學者、重農學派の諸家の意義をよく了解して居ない事を指摘した點なぞから推察されるのである。併し此處に私の特に興味を感じる點は、後に彼の社會學及び實證政治體系として發展されたもの、即ち當時彼が眞の政治學とか實證的政治學とか稱せるものも、亦實證倫理學と稱せるものも、總て經濟學を基礎として建設され築き上げらる可きものと考へて居たことである。そうして此の見解は、つまり一切の社會科學は經濟學に基いて建設さる可きものと云ふ意味に解され得るのである。要するにコントは一切の社會科學は、方法論的には經濟學を基礎として建設さる可きものであると云ふ思想から出發したのである。尙ほ右の書簡によれば、彼は一切の社會科學の基礎としての經濟學の實質的意義をも重要視して居たことが察知される。されば彼若し其の見解を保持して、彼の偉大なる組織的能力を働かせたならば、マールクスに先だち、マールクスよりも勝れたる唯物史觀の一體系を建設したかも知れない。併しかゝる偏狹なる思想體系を立てるには、彼の學識はあまりに博大であつた。彼の學識は只諸般の社會科學にのみ限られて居なかつた。彼は少年時代から勝れたる數學的才能を有し、大學に於ては主として數學を學び、晩年に至るまでも大學の數學教授の地位を望んで居たほど、

彼は數學に秀で、居た。更に天文學、物理學、化學及び生物學等に於ても、當代の其等の諸科學の奧義を極めて居たことは、「實證哲學講義」に就て見れば明白であり、且つまだ年若き彼が自宅に於て興へた其の「講義」に、當時其等の諸科學に於ける有名なる幾多の大家をして、喜んで聽講させたことによりて推察される。恐くは當時の佛蘭西に於て、彼ほど博大なる學識を具備せる人はなかつた、否な其の後もないと思はれる。かくて彼は到底唯物史觀の如き偏狹なる思想體系を立て得なかつたのである。

尙ほ彼は右の書簡中に既にサン・シモンの政治的實際的方針を批評し、先づ科學的或は理論的方針を重んず可きを主張して居るが、其の後も彼は其の主張を固持し、又夫れが爲めに、一度サン・シモンの門に入り、大にサン・シモンの寵愛を受けたに拘らず、遂に其の門を去るに至つたのである。そうして其の理論的方針を先づ特に重要視する彼の傾向は、彼をして遂に主知主義的な龐大なる實證哲學體系を建設するに至らしめた。かくて經濟學を以て一切の社會科學の基礎と見る彼の最初思想は、其の後實質的意義を失ない、主として其の方法論的意義に於て、彼の社會學方法論の形成を指導するに止まつたのである。要するにコントは、社會學は當時の諸般の社會學中特に經濟學が實際に運用して居る方法論に従ひ、現實なる事實の觀察に基ひて獲得される社會現象の實證的知識を、論理的に組織し、統一する學的體系として建設さる可きものと考へたの

で、彼の社會學方法論はつまり經濟學がまだ組織されて居ないが、併し現實に運用して居た方法論の影響の下で築き上げられたのである。かくてさきに述べし如く、ミルはコントの社會學方法論の影響によりて、始めて經濟學方法論を組織的に展開したのであるが、然るにコントはまだ組織されて居ない經濟學方法論の影響の下で、彼の社會學方法論を築き上げたので、其の始源に於て方法論上、社會學と經濟學とが如何に密接に結び附いて居たか、學ばれるのである。

却說社會學と經濟學は方法論上其の始源に於て、以上述べしが如く甚だ密接なる關係を有するものであるが、其の後の發達に於ても、兩者の方法論上の關係はヤハリ甚だ密接であることが見出される。併し私は本論文に於ては、特に兩者の方法論の發達を、相互の交渉に於て詳しく論究せんとするのではないから、只兩者の密接なる交渉の特に顯著なる場合を挙げ、社會學者も亦經濟學者も、各々其の方法論を研究せんとするに當つて、特に他の方法論の研究に注意する必要を示すに止める。

ゼ、エス、ミルが「論理學體系」第六篇に於て、社會學一般方法論を特に社會學と經濟學とに就て詳しく論述し、社會科學一般 法論の組織的論述に基いて、特に社會學と經濟學との方法論を組織的に展開して以來、先づ吾人の殊に注目すべきは、經濟學の方面に於ては獨逸の舊歴史派の方法論である。但しロッシェルが *Grundriss zu Vorlesungen über die Staatswirtschaft nach*

geschichtlicher Methode を公にしたのは千八百四十三年、即ちミルが「論理學體系」を公にせると同年であるから、英國經濟學の抽象的演繹的方法論に反對して、歴史的歸納的方法論を主張する獨逸歴史經濟學の運動は、ミルが英國經濟學の方法論を始めて組織的に論述せる年に始まつたのである。此處にロツシエルを始め其他の舊歴史派の首領、ヒルデブラントやクニース等の方法論に就て、簡單にも論述する暇はないから、只此處に私の重要視する點から見て、少しく述べるだけに止めるが、何人でもロツシエル、クニース、ヒルデブラント等の經濟學方法論を少しく注意して研究すれば、其等の諸家は單に經濟學方法論だけを論述して居るのではなく、先づ粗雜ながら學問論上の一定の見解を立て、夫れに基いてヤハリ粗雜ながら社會科學一般方法論を組織し、更に夫れに基いて經濟學方法論を組織的に論述して居ることを見出すであらう。要するに其等の諸家はまだ形式的には社會學の存立を承認して居ないが、併し實質的には社會學方法論と認む可きものと密接に結び附けて、經濟學方法論を組織的に論述して居るのである。(直接に其等諸家の著書に就て一々研究する便宜を有しない人々は、右に述ぶる私の主旨を、左の諸書によりて學ばれた。Max Weber, Roscher und Kries und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie (Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre), Small, Origins of sociology, 1924. Kerschagl, Einführung in die Methodenlehre der Nationalökonomie, 1925.)

更にシュモラーに率ひられて勃興せる、獨逸新歴史派の方法論に就て考察すると、舊歴史派の方法論に於て見出される右の傾向は、一層明白に現はれ、且つ夫れは一層學問論的及び組織的に論述されて居ることを見るので、要するにシュモラーの經濟學方法論は、舊歴史派の所説よりは一層精練されたる學問論を基礎として立てられたる社會科學一般方法論に基き、實質的には社會學方法論と認む可きものと密接に結び附けて、組織的に詳しく論述されて居るものである。(右の主旨をシュモラーの諸著作に就て論究する便宜を有しない人々は、Bernard Pfister, Die Entwicklung zum Idealtypus, ein methodologische Untersuchung über das Verhältnis von Theorie und Geschichte bei Menger, Schmoller und Max Weber (1928) に於ける Schmollers historische Methode に就て學ばれたし。)

今私は右に述べし如く、獨逸の舊新歴史派の經濟學方法論を一貫して、實質的には社會學方法論と認めらる可きものと密接に結び附けて、經濟學方法論を詳しく組織的に展開せんとする方法論的傾向が、見出されると考へるのであるが、更に其の傾向に於て殊に社會學者の注目すべき點は、歴史派經濟學方法論の多くの根本思想と、コントの社會學方法論の多くの根本思想との間に見出される大なる類似である。然らばかゝる重要なる類似が兩者の間に存在するは、如何なる理由によるかを研究することは、社會科學方法論の研究上一の重要なる問題であると思ふが、此處

に詳しく論述することは出来ないから、只簡単に論述するだけに止める。舊歴史派の一大家クニースは、歴史派の方法論を論理的に最と組織的に且つ完全に論述したと云はれる其の著 *Die politische Oekonomie von Standpunkte der geschichtlichen Methode* (1832) の第二版 (1883) に於て述べて居る處によると、彼が同書を出版せし當時千八百五十二年頃には、彼自身はコントの著作を全く知らなかつたのであるが、恐くは當時の總ての獨逸の經濟學者も彼れと同様に、コントの著作を全く知らなかつたであらうとの事である。併し尙は彼の述べて居る處によると、其の後彼はコントの著作を研究するに至つて、其の中に彼自身の論結のさほど多くの豫見或は並行説を發見して、大に驚いたの事である。クニースの右の言述に對して英國のイングラム(コントの人類教までも繼承せる)熱心なるコント派の學者にして、英米經濟學界に於ては殆んど古典的となつて居る「經濟學史」*A History of political Economy* を著述せる人、又千八百七十八年ダブリンに於ける *The British Association for the Advancement of Science* の大會に於て、「經濟學及び統計學部」の部長としての講演 *The Present Position and Prospects of Political Economy* により、大に英國の經濟學者の注意を惹起したが、獨逸に於ても右の講演が如何に經濟學者の注意を引たかは、翌年コントラードがフオン・シェールをして之を獨逸語に翻譯させたことによりても推察される。但しイングラムはコントの社會學方法論を恐くはコント以上に推し進め、經濟學を全く社會學の一部分或是一章として、其の中に吸収せんとしたのである。

「實證哲學講義」は千八百三十年から同四十二年までに出版されて居たこと、ミルは既に千八百四十一年にコントと交通して居たこと、又千八百四十三年に公にせる「論理學體系」中にコントを讚賞して居ること等を憶ひ起すと、クニースが千八百五十二年に彼の「歴史的方法の見地から見たる經濟學」を著述する頃、彼自身のみならず總ての獨逸の經濟學者が、全くコントの著作を知

らなかつたと云ふのは、獨逸の學者の評判の虚心坦懷或は文献探求の周到に對して名譽あることゝは思はれないと皮肉り、又後にコントの著作を研究して、其の中に彼自身の論結のさほど多くの豫見或は並行説を發見して大に驚いたと云ふは、さもある可きことで、是れクニースの方法論に於て眞に價值ある總てのものは、コントに於て一層大規模に適用され、又哲學の大進歩を表示する廣大な力を以て設計されて居ることが、發見さる可きであるからであると、ヤハリ皮肉つて居る。(Ingram, A History of Political Economy, 1915, pp. 198, 199.)

併しヴェンチクの如きは、コントの社會學方法論の根本思想と、獨逸歴史派經濟學の方法論の根本思想との間に存在する多くの重要な類似は、つまり佛獨の社會科學的思惟の發展に於ける一の並行線と認めらる可きものなるを、種々の方面から論證せんとして居る。(Wendt, Auguste Comte und seine Bedeutung für die Entwicklung der Socialwissenschaft, 1894, SS. 247-290.)

私は獨逸舊歴史派の諸大家が、千八百五十二年頃にもまだコントの著作を直接閱讀して居なかつたと云ふ意味では、全く知らなかつたと云ふのは、眞實であらうと思ふが、併しコントの思想をも全く知らなかつたと云ふことは出来まいと思ふ。しかもヴェンチクの如くに、舊歴史派の方法論の發達を獨逸精神史上より深く究明せんとすることは、單にコントの思想を輸入せるものとして説明するよりも、一層深く其の意義を理解することが出来ると思ふ。又私は舊歴史派の方法

論は、タトヒ實際上如何程かはコントの思想の影響を受けたとするも、しかも主として獨逸精神史上及び社會史上から本來夫れ自身で發達したものと見ることは、兩者の重要な類似が社會學方法論と經濟學方法論との間に、本質的關係の存在することを證示する歴史的事實として、一層有力なるものとなると考へる。

尙ほ獨逸歴史派經濟學に反抗して勃興せる、澳大利派經濟學の方法論に就て考察するも、吾人は前者とは異なる方面に於て社會學方法論と經濟學方法論との間に存立する本質的關係を、明かに學ぶことが出来る。近代經濟學史上「方法論等」として知られて知る有名なる論戰を、シユモラーに對して開始せる澳大利派の創設者の一人カール・メンガーが、同派の方法論を組織的に詳論せる千八百八十三年出版の名著は、Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, und der Politischen Oekonomie insbesondere と題されて居るので、其の題名によりても察知される如く、メンガーは社會科學一般方法論に結び附けて、かくて社會學方法論に結び附けて經濟學方法論を論述して居るのである。（同書は今日は高價な珍本となつて居るので容易くは手に入らないが、其の一般は Small, Origins of Sociology, chap. XII. 又其の根本思想の批判的要旨は Bernard Pfister, Die Entwicklung zum Idealtypus, I. Abschnitt, 2. Kapitel: Mengers Wissenschaftslehre によりて學ぶことが出来る。但し京都帝國大學では十數年前同書一部購入した。）

終りに私は社會學方法論と經濟學方法論との密接なる本質的關係を證示するものとしてマックス・ウェバーの方法論に就て少しく述べて置く。今シュモラーとメンガーとの「方法論争」は、經濟學史上有名であるに拘らず、實質的にはあまり意義ある結果を生ぜずして終つたのである。併し夫れは其の儘で放棄して置く可きものでなく、吾人は兩者が基礎とするよりは更に深奥なる學問論に基いて、其の徹底的な有効な解決を圖る可きである。マックス・ウェバーは早く其の點に着目せる一人にして、彼は彼の時代に於ける最新の一學問論即ちリッケルトの學問論を中心となし、其他の學問論をも參酌して、あまり組織的ではないがとにかく彼れ自身の學問論を立て、夫れに基いてシュモラーの方法論とメンガーの方法論とを止揚し、一層高等な總合的統一的な經濟學方法論を展開せんとしたのである。併し彼はかくして達成せる彼の經濟學方法論の一般的原理は、只經濟學の科學的確立の爲めにのみ適用されるに限られるものでなく、一切の社會科學の科學的確立の爲めにも適用さる可きものなるを覺り、かくて彼は了解社會學(die verstehende Soziologie)と稱する社會科學一般方法論を形成したのである。(Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 1922. Marianne Weber, *Max Weber ein Lebensbild*, 1826.) 尙ほ本節の問題から見て、マックス・ウェバーの社會科學方法論の中心的基礎たるリッケルトの學問論に就ても興味ある事實がある。リッケルトの學問論に於ける科學分類論上の一新説、即ち科學を根本的に自

然科學と文化科學（嚴密に云へば歷史科學的文化科學）との二部類に大別する説は、本來彼の師ヴィンデルバルトの自然科學と歷史科學との區別を根元とするものであるが、併し彼は彼の説を詳しく展開するに當つて重要な材料の一として利用したのは、さきに挙げし澳太利派のメンガーの方法論的著作「社會科學殊に經濟學の方法の研究」であつたと云ふ。

却説以上述べ來りし處によりて知られる如く、社會學方法論と經濟學方法論とは、其の始源に於て甚だ密接なる關係を有するのみならず、其の發達に於ても常に密接なる關係を保持し、相互的影響の下で相携へて發達して來たのであるが、此の如くに兩者の間に密接なる歷史的關係の存在するは、是れつまり兩者の間に密接なる本質的關係があるからである。されば社會學者は其の方法論の研究に於て、常に經濟學の方法論に注目せねばならないと同様に、經濟學者も亦其の方法論の研究に於て、常に社會學の方法論に注目せねばならぬ。そうして私がさきに本雜誌に於て、連續して其の一部を公にせる私の社會學方法論は、經濟學方法論の發達に大に注目して築き上げたものであるが、私は更に私の社會學方法論から見て、現今の經濟學方法論を批判的に吟味し、夫れによりて私の社會學方法論を一層確かめ、又詳しく展開すると同時に、嚴密なる科學としての經濟學は、如何にして方法論的に確立さる可きものであるかを見定めたいと思ひ、本論文を公にせんとするのである。

(二) 現今の米國經濟學の方法論的根柢二方針

としての限界經濟學と制度經濟學

私は前節の「方法論上に於ける限界經濟學と制度經濟學との歴史的關係」を、本論文の緒言として極簡単に述べるに止める程であつたが、書いて行く中にツイ興味に驅られて、あまりに多くの紙数を費やせる爲め、本號分に於て本題に就て論述し得る紙數は大に減少したから、本節に於ては只現今の米國經濟學に於ける多數の諸方針中、私が特に限界經濟學と制度經濟學とを以て、根本的二方針と見る根本的理由を簡単に指示するだけに止め、次回分から、本題に就て前節の終りに述べた主旨から見、詳しく論述したいと思ふ。但し本雜誌編輯の都合上、次回分から夫れ夫れ獨立な題名を附けて置くが、併し其の實は獨立せる諸論又でなく、數回に亘りて連續する一論文であるのであるから、讀者は其の積りにて閱讀されたい。

今日は何れの文化國民にありても、社會諸科學中特に經濟學が最も盛んに研究されて居るのであるが、前節の始めに述べし事によりて察知される如く、米國に於ては經濟學の研究は殊に盛んであると思ふ。そうして夫れは單に外部的に見て盛んであるだけでなく、内部的或は實質的に見ても同様であるので、今日の米國經濟學に於て發達して居る諸方針の數は、獨逸經濟學に於て發達して居る諸方針の數よりも多いと思はれる。然るに今日我國の經濟學者、殊に若い經濟學者の多數が、只或は主として獨逸の經濟學のみを重要視して、其の研究に力を注ぎ、米國の經濟學を無視し或は少なくも輕視する傾向あるは、歐米何れの國の學界にも隸屬せず、獨立なる一學界として發達す可き我國の經濟學界の爲めに決して喜ぶ可きことでないと思ふ。但し私は我國の經濟學界が獨立な一學界として發達する爲めに、最も重要な根本問題の一は、歐米諸國殊に英

米獨佛等の經濟學方法論を精究して、一段高き見地から之を總合し統一する經濟學方法論を築き上げ、先づ我國の經濟學界の一般的基礎を確立することであると信ずる。そうして今日我國で勃興しつゝある徳川時代の學者の經濟思想の研究も、右の目的に對して何か貢獻する處ある或物を發見せんとする意圖を以て遂行されるに於て、此處に始めて重大なる經濟學的意義を有するものとなると思ふ。私は我國の經濟思想史を研究されて居る若い經濟史家が、此の點に注目されんことを特に切望する。併し今日の處で、右の目的を達成する爲めに先づ何よりも肝要なるは、歐米諸國の經濟學方法論の詳しき批判的研究である。然るに此の事は今日の認識論、論理學及び方法論、即ち私が約して學問論 *Wissenschaftslehre* と稱するものゝ精究に基いて、新たに建設せる可き學問論を前定して居るので、實に甚だ困難なる仕事である。そうして夫れは實に我國の社會學者が協力するを要するのみならず、更に大に我國の哲學者も協力するを要する仕事である。

本論文の一般的目的是前節の終りに述べしが如きものであるが、更に其の特に目指す點は、私が今日までに苦心慘憺漸くに大體上築き上げたる社會學方法論が、獨立な一學界としての我國の社會學界を建設する一般的基礎を確立する爲めに貢獻すると同時に、獨立な一學界としての我國の經濟學界を建設する一般的基礎を確立する爲めにも、何物を貢獻し得るかを指示せんとするに在るのである。

却設私は上に述べし主旨にて、今日我國では比較的輕視されて居る今日の米國經濟學の方法論を、本論文に於て批判的に考察して見たいと思ふのであるが、今米國に於ける經濟學研究の今日の隆盛は、其の端を千八百八十年代に發して居るので、同年代の始めに獨逸から歸國せる多數の優秀なる若き經濟學者が、千八百八十五年に「米國經濟學會」を建設して盛んに活動を始め、夫れより米國の經濟學は連續的に駁々として發達して來たのである。そうして獨逸から輸入された歴史派經濟學が、新しき方針として大に發達すると同時に、正統派經濟學に取り代つて、塊太利派經濟學或は夫れと同じ方針の純理經濟學が大に發達し、現世紀の始めまでは正統派の地位を占めて居た。是れ即ち米國に於て限界經濟學(Marginal Economics)或は限界主義(Marginalism)と稱せられて居るものである。然るに現世紀の始め頃からして、限界經濟學に猛烈に反對して、新方針を立てんとする運動が勃興し來り、又其等の新方針を參酌し或は同化して、限界經濟學を改造せんとする企だても起り、此處に米國經濟學界は今日見るが如き盛況を呈するに至つたのである。そして限界經濟學に反抗して起れる新しき方針には、制度經濟學(Institutional Economics)或は制度主義(Institutionalism)と稱せられるもの、安寧經濟學或は幸福經濟學或は厚生經濟學(Welfare Economics)と稱せられるもの、非功利主義の心理學的經濟學と稱せられる諸方針、(例へば本能派 "Instinct" School 經濟學と稱せられるものや、フロイド派經濟學と稱せらる可きも

のや、行動主義 Behaviorism 經濟學と稱せらる可きもの等)、記述經濟學或は統計的經濟學と稱せられるもの其地種々ある。然るに此等の新しき諸方針は、夫れ夫れ特に強調する特殊な目標を有するに拘らず、種々に相交叉して居る。そうして一定の方面から見れば、制度經濟學は其他の新しき諸方針を包括するものと見做し得られる。殊に方法論的に考察するに於ては、制度經濟學は限界經濟學に對立する方針を、最も徹底的に發揮するものと認め得られる。それで私は今日經濟學に於ける方法論的對立は、限界經濟學と制度經濟學との對立によりて、最もよく發揮さる米國にて居ると考へ、兩者の對立を私の社會學方法論から見て、方法論的に批判し、結局科學としての經濟學は如何にして確立さる可きかを見定めたいと思ふ。但し今日の米國經濟學に於ける對立を、物價經濟學或は市場經濟學と厚生經濟學との對立と見る人々がある。そうして此の對立は實際的目的の上から見れば、一は營利或は利潤を目的とするものにして、他は國民の安寧幸福或は厚生を目的とするものであるとして、實際目的論上經濟學の對立を適切に表示すると思はれるが、併し科學としての經濟學は實際目的論に左右されてはならぬものであるから、夫れによりて科學として經濟學の對立を表示せんとするは正當でない。尙ほ後に述べる如く制度經濟學も目的論的分子を含んで居るが、之を科學としての經濟學の一方針を代表するものと見る場合には、其の方面は看過さる可きである。

私は右に述べし如く、今日の米國經濟學に於ける科學的對立は、限界經濟學と制度經濟學との對立によりて、最もよく發揮されて居ると見るのは、實際上制度經濟學は限界經濟學に反對する其他の諸方針を、一定の方面から見れば總て包括して居ると認められ得るが爲めのみならず、方法論的に見て限界經濟學との對立を最もよく發揮して居ると認め得られるからである。然らば私は如何なる意味にて、限界經濟學と制度經濟學との對立は科學としての今日の米國經濟學の對立を、方法論的に最もよく發揮して居ると認めるのであるかと云ふに、要するに夫れはつまり、兩者は方法論上科學としての經濟學の根本的二部門と認めらる可きもの、即ち經濟靜學或は靜態經濟學 (economic statics or statical economics) と稱せられるもの、及び經濟動學或は動態經濟學 (economic dynamics or dynamical economics) と稱せられるものを、夫れ夫れ典型的に表現して居ると考へるからである。然るに經濟靜學或は靜態經濟學の概念、及び經濟動學或は動態經濟學の概念は、種々なる意味に解されて居るので、之を以て科學としての經濟學の根本的二部門を、方法論的に正當に表示するものと認めんとするに於ては、吾人は先づ兩者の概念を嚴密に規定せねばならぬ。それで私は先づ次回に於て兩者の概念の諸意味を吟味し、嚴密には如何に規定する可きかを論じたいと思ふ。